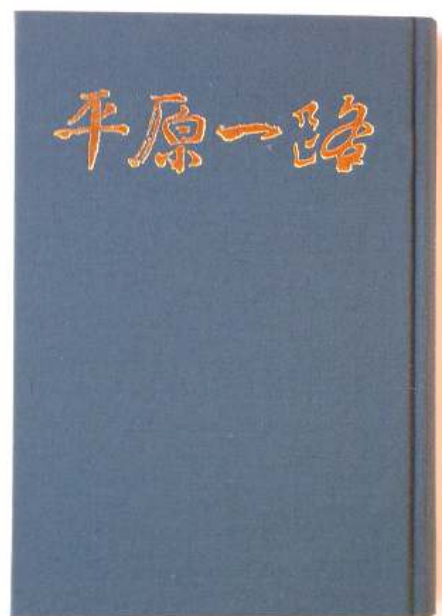
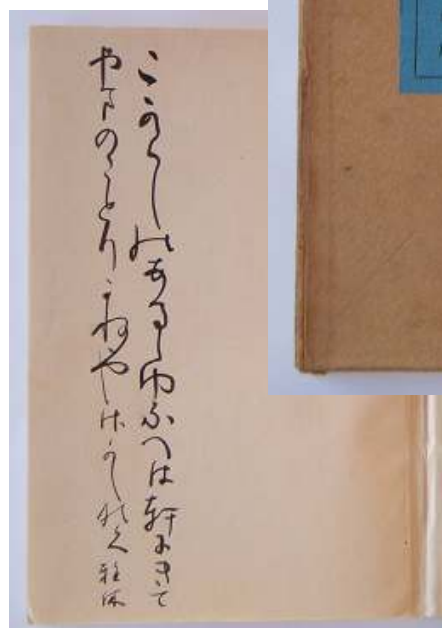
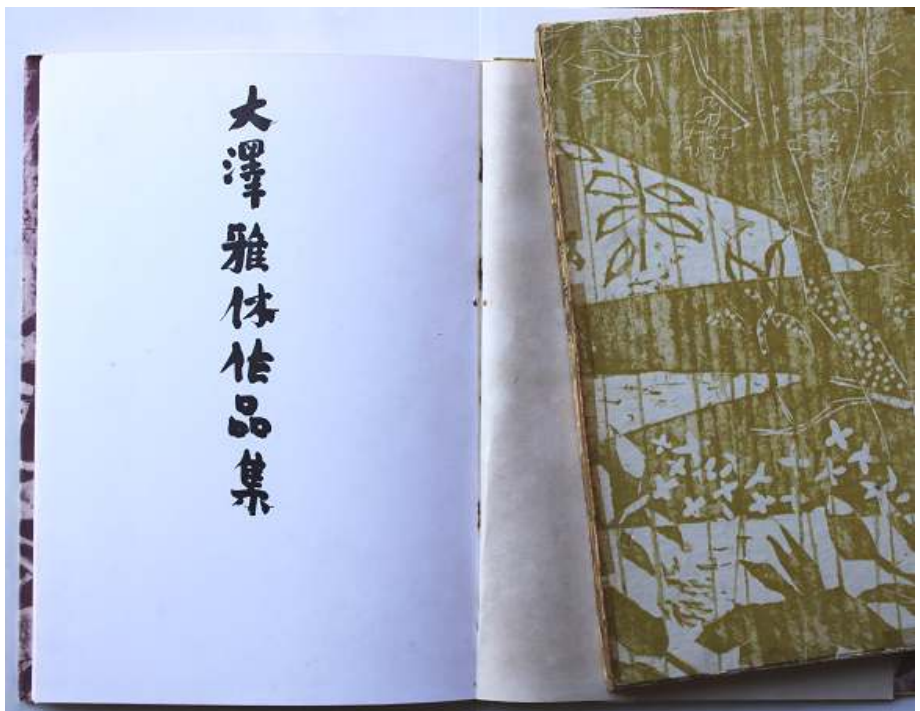
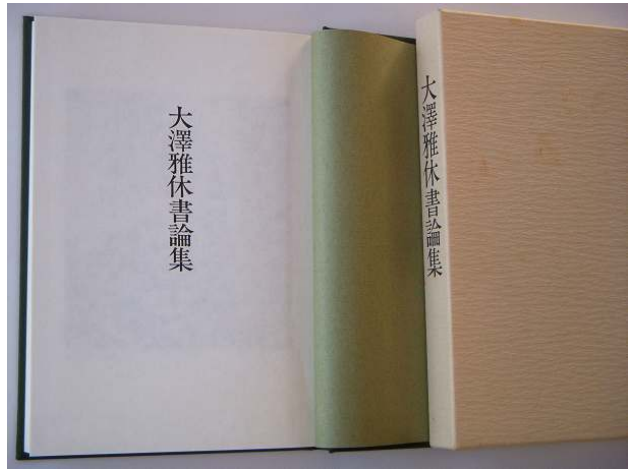
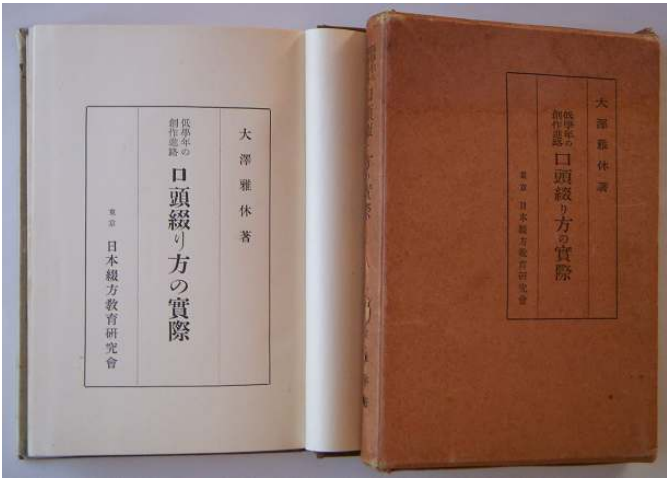


大澤雅休に関する主な出版物





雅休のことば

弘法大師の書について

かの風信帖二帖と急就章の三帖も勿論傑作中の傑作たることは疑うべくもない。私はこれ等を相当専門に書はれた方々にもすすめて鍛錬せしめているし、又小学校の手本や女学校の手本程度のものしか習って居ない中少年にも習わしめて見ている。ところが不思議のことに二、三ヶ月の練習にして見違えるほどの進歩を見筆力が旺盛になり、氣象が引立ってきて、大胆に真率に筆を運んで、深く堂々と、そして書の呼吸というものを会得するには驚いた。そしてこれを基礎として、他の古典的なものを習わしめているが、此の書風によって得た力は直ちに晋唐の他の法帖にも取りかかり得ることの可能を立証することができたのである。

即ちここを出発として充分練習を行って置けば降っては道風佐理行成にも容易に近づき得るし、もっと溯って晋唐の古典にも肉迫し得る素地が養い得るのである。

大師の書は由々しくも近づき得ない傑出したものであるが、その程度の深淺はあっても、三才の童児にも親しまれる可能性があるのである。そして誰が習っても決して他の気分で書いている象徴風のものどちがって疾に穽ることが無いのが特徴である。

(野菊 19 卷 9 号 『大澤雅休書話』)

のびのびと書くこと

のびのびとした書を書くことにして下さい。生き生きとした書をかいて下さい。網にかかった若鮎のように、ぴちぴちとして匂深い書を書いてください。疲れた書は見る人を疲れさせます。ものうい書は見る人をもの憂くします。死蛇のような書は不愉快を感じさせます。のびのびとした生き生きとした書はどうして出来ると思いますか、それはやはり、書く人の心もちがそうでなければなりません。

心もちは大勢となって姿勢や動作にもはっきりと表れます。

生き生きとした、のびのびとした心を持てば硬ばった姿勢や窮屈な姿勢や、重苦しい姿勢を嫌います。その心もちとじっくり合った姿勢をとるようになります。筆のもちかた、筆幹のにぎりかた、運筆のしかたもやはりその心もちとじっくり合ったように工夫します。

のびのびとした木や草をよくみて下さい。生き生きとした魚や鳥の姿や動作をよく観察してみてください。そこには少しも不自然のところも窮屈のところもありません。そして美しいのです。姿勢や動作によって心もちは素直に表わされます。

のびのびとして生々としていけば自然明るい心もちになります。

(書原 2 号) 『大澤雅休書話』より

遊びのように学べ

書をまなぶことはむづかしいことではない。自分のやりたいようにやればよい。ままごとあそびのつづきのようにやっていくのがよい。運動をするような心もちでやればよいのです。大人だっ

てはじめは映画や芝居やピクニックに出かけるような心もちでやればよいのです。むりにむづかしい姿勢や執筆や顔付をしておかなければならないのだなどと考えなくてもよいのです。

白い紙へやわらかい筆で墨黒々とかいて行くこと其のことだけがたのしければよろしい、そのことになりきって一切の他事を忘れて書けさえすればそれでよいのです。

そしてお終りにするのが惜しくてたまらなくなり、「又あした遊びましょう」といって硯や筆や紙とていねいにあいさつし、あしたのことをねがってわかれるというようにあそびほけられたらそれでよいのです。

ただ、同じかくれんぼでも鬼ごっこでもこままわしでもそのあそびかたにはよいあそび方とわるいあそびかたはあるでしょう、ですからよいあそびを選んであそぶ子供たちに習ってよい方向へよい方向へとなおして行くようにすればたのしみながら書もよくなるし人間もよくなっていくでしょう。

(書原 14 号)『大澤雅休書話』より

歪みということ

茶に使う碗がゆがんでいるのを気にする者は多くいないと思うし、風当りの強い海岸や岩山の樹木が幹も枝も歪み曲っているのを否定的の意味で気にするものはあるまい。

山岳の凹凸、川の曲折に於いても同じことであろう、否寧ろこれらは、美の原則などを説明されないでも却って美しいものとして見るであろう。然るに一度転じて書道のことになると、少し歪んでいると気にし、それを醜いものとみるものはあってもそれを美しいものとみる者が極めて乏しいのは何ということか。

書は人工的、機械的美であって、自然の生命を象徴した線と構成と章法との綜合された、造形的の美であってはならないと言うのか、近代工業主義の発達は人工的に簡便のものであって、自然美とは対照的に直線的、均整的簡捷的単純性を極度に求めている。(中略)

歪みの美しさのわからない人たちに書のことを話すぐらい無駄であり無益のことはない。

甚だしい者になると、相当の書家でありながらこの美しい歪みの美を見る力がないため一つ一つの均齊のものにと訂正を加えてそれを手本として世に出しているものさえあるのである。

そこへ行くと画家の方は形というものに対しての感覚がずっと洗練されていて、デフォルマションということに心血をそそいでいるものが多い。

其の本家本元である書家の方では自分の唯一の宝を放棄することを名誉かの如くに振舞っているから歯がゆいのである。

そこで私はそういう人々に対しては率直に言って聞かせるのである。歪みの美しさ即ち「不相称美」というものがわかるまでは筆を持たない方がよろしいと。

(書芸苑)『大澤雅休書話』より

学童疎開児童と大澤雅休

尾田 武雄

太平洋戦争末期の戦局悪化に伴い、大都市への空襲が予想されるようになった。政府は昭和 19 年 7 月から重要 13 都市の国民学校初等科の児童を近郊農村・地方都市への集団移動をさせる方針を決めた。つまり学童疎開であり、地方に縁故のないものは学校ごとに集団疎開をさせた。

東京都渋谷区の場合、疎開先として静岡県と富山県の二県が割りあたえられ、区内の小学校 22 校が抽選で疎開先を決められた。富山県では、8 月 29 日に帝都学童集団疎開受入要綱を定め、東京都より割当ての 1 万 5 千人の受け入れに万全を期することになった。東砺波郡太田村（現砺波市太田）国民学校では昭和 19 年 9 月 6 日に東野尻村・柳瀬村・庄下国民学校と共に渋谷区大和田国民学校の集団疎開児童を受け入れ、専念寺を宿舎とした。

その後、昭和 20 年 4 月 18 日、同じ渋谷区の幡代国民学校の疎開児童を受け入れることになった。幡代国民学校の 3 年 1 組を受け持っていた大澤雅休は、2 人の教師とともに光圓寺（砺波市久泉）の寮長として赴任してきた。雅休 56 歳であった。

学童の集団疎開は、2 つの方法で受け入れられ、疎開児童を学年に分けて疎開先の学校の各クラスに編入する方法と、疎開児童だけで教室を作って別個に学習する方法であった。先に来ていた大和田国民学校は前者であったため、疎開児童もそれなりに太田の中に溶け込んでいた。しかし、後から来た幡代国民学校は、後方で学習方法も違っていたため、なかなか太田に溶け込めなかったようである。在来児童の中にいじめっ子を見つけた時、雅休は、熱血先生よろしく投げ飛ばしたという。（『郁文・第四部』）

5 月 29 日、東砺波郡の校長会が太田国民学校で開かれ、主な協議内容は「疎開児童の受け入れ援助について」ということであった。協議のあと郡内の校長は、専念寺と光圓寺で児童の起居の実際を見た。光圓寺では、寮長大澤雅休が「東京の父母へ、今日の無事を告げる和歌」を朗読した。東京ではその数日前、5 月 24 日から 3 日連続の爆撃で宮城は炎上し、大半は焦土と化したのである。無事を告げる父母は、はたして無事であり得ようか。父母の膝下を離れて仏前に合掌する姿に、感激居士、滝田芳蔵地方事務所長はじめ、参観の人々の頬を涙が伝った。（『郁文・第四部』）

また雅休が学校の宿直の夜銃器室で、燈灯規制にもかかわらず電燈を点け夜遅くまで「書」の練習をしていた。それを見た時の太田村助役安念金之介氏（明治 35 年生まれ）が、この非常時にも関わらず何事かと叱りつけたことを回顧されていた。雅休より 5 歳年下の安念助役とは、その後さらに親交が深まったのである。当時の太田村長入道忠昭氏の自宅を、雅休はしばしば訪れたという。その子息忠靖氏はその当時の雅休について、その趣はゆったりとし、そして悠然とした姿が今も心に印象深く残っていると話される。

その思い出には、雅休が囲炉裏にどっかと座り、そんなに多くも語らず、里芋の田楽を

うまそうに食べられたりして、一日中でもそこに座っておられたことや忠昭氏と奥さんらで漢詩や短歌、俳句などについて語りあい、それまでに作った短歌を雅休に推敲していただいたという。中でも特に印象に残っているのは、囲炉裏の前であぐらをかく雅休の前がはだけていたおり、目のやり場に困っていると、檜の木の薪のため火がパチッと弾け火の粉がそこに飛び込んだ。しかし雅休は火の粉を払おうともせず、平然としておられたことがあったと話された。

疎開中に「書」を習われた人には光圓寺の坊守である平田加都理さんや久泉の佐伯與敏、隣村の上田栄之介の各氏がある。上田氏は雅休の思い出で強く印象に残っていることは、「書道には、まず古典を勉強しなさい。」と常に言われたという。

昭和20年に疎開児童とともに光圓寺に疎開してきた僅か数ヶ月の期間に大澤雅休が残した文化的遺産は、この展示会によって再認識され継承されるだろう。

大澤雅休の書

上田 北山

このたび、集団学童疎開の引率で、太田村光圓寺に来て生活していた時期を捉えた「大澤雅休展」が企画されました。

雅休は、昭和20年4月18日から11月5日までの約200日を太田の地で過ごしました。その後、昭和24年に東京日本民藝館にて棟方志功との出会いがあり、志功の疎開先が福光町であったこともあり、再び砺波の地での交友が続きました。そうした活動の中で雅休の書も大きく変わり、砺波地方の作家にもたらされた影響も大きなものがあります。今年は折しも雅休生誕120年に当たります。この時期に「太田の地にしか無い」雅休の所業を掘り下げ、広く知って頂くまたとない機会と思います。

私が初めて「大澤雅休」を知ったのは、昭和42年だったと思います。現代書作家協会主催の公募展の副賞が『大澤雅休作品集』でした。それを見せて頂いて、驚きと共に大いに発奮したことが思い出されます。

以後暫く雅休とは疎遠になっていましたが、平成2年、金平正二氏が中心となられて太田公民館で「大澤雅休生誕百年祭」が開かれました。その内容は古典臨書とそれに基づく漢字作品で、その作品集とは大きく異なるものでした。それから数年過ぎた平成7年頃、太田での雅休の書業について改めて知りたくなり、金平氏を訪ねました。そこで見せて頂いた資料の多くは古典臨書でした。疎開時の雅休は多くの人と交わり時勢の事や書の事について熱く語り、古典研究の大切さを力説されていたとのことでした。その事は後の礼状の中にも見えています。

雅休は、明治43年に温泉銘の拓本を手にして感動、その後、比田井天来の温泉銘の全臨を見て天来門に入ったとあります。また、同じ天来門の上田桑鳩らの書道芸術社に加盟し

書論を展開、昭和13年に平原社を結成、廣大無辺な書を求めて活動、昭和23年に『書源』を発行（没年迄続き57号で終刊）。その中には「《字》を習うのではなく、《書》を習うべき」と直感を重視し精神を基調とする考えが深く述べられています。作品は年毎に変化し、極濃墨で紙を覆い、また淡墨で、隸書で、かな文字で、その表現方法は全く心の趣くままのように思えます。棟方志功の「書は技巧ではなく、形態を見せるものでもなく、心頭ほとばしるところからうまれるものでなくてはいけない」を地で行っているように見えます。そうした中、当時（昭和24年）砺波地方での先生方、山本聿水（34歳）、深松梅月（27歳）、表立雲（19歳）、宮崎重美（15歳）と血気盛んな時の出来ごとです。心底書に打ち込まれた様子が手に取るように分かります。その熱気の基を成したのが、太田での日々であったように思えてなりません。昭和28年日展出品作「黒嶽黒谿」を絶筆として64歳の生涯を閉じた雅休、多種多彩な中に、作品集に収録されている作品群は昭和24年（60歳）から28年（64歳）の僅5年間です。壮絶な生涯に書のあり方を改めて教えられる思いです。

雅休先生との出会い

入道 昭子

私は、県立津沢高等学校に入学して書道部に席を置きました。当時の書道部の先生は、山本聿水先生でした。

先生は真面目で物静かな方でした。

昭和25年6月だったと思いますが、大澤先生が棟方志功宅に来られるということを知り、私は友達を誘ってその講習会に出かけました。

この時、棟方先生と大澤先生は豪快で気合が入った合同作品を製作されました。その場を目の当たりにした私たちは大変驚き、固唾を呑んで見ていたものです。また、棟方先生の奥様が横に付きっきりで先生の汗を拭いておられたのも印象的でした。

その10月、棟方先生や大澤先生らが中心になって「書の径の会」が設立され、私はその会の会員になって、たびたびその講習会に参加しました。既に長い歳月が過ぎたので当時、女学生であった私は、詳しいことはほとんど忘れてしまいました。

しかし、今も記憶に残るのは、大澤先生が腰のない「どじょう」のような長い毛の筆を使い、さらさらっと、一気に書き上げられたことです。

しかし、私にとって残念なことは、昭和26年に山本先生が大澤先生を慕って群馬県高崎市へ越されたことです。

山本先生の送別会に私たちも参加しました。その後、先生は群馬県書道界を代表される人になられたと聞いています。私は、山本先生のお陰で日本的な芸術家、大澤雅休先生や大澤竹胎先生、棟方志功先生と出会うことができたことをありがたく思っています。



昭和 25 年 (棟方 志功宅)

筆者: 3列左から3人目、前列左の2人目から中島巴水、大澤雅休、棟方志功の各先生



昭和 26 年 6 月 3 日 山本聿水先生の送別会(表 立雲宅)

筆者: 前列左から2人目、4人目が山本聿水先生